

# いすずめの里だより

第十号  
 風薫り、夏も近づく八十八夜

八十八夜とは、立春から数えて八十八日目のことを言い、今年は五月二日にあたります。八十八夜といえはお茶を思い浮かべる人が多いでしょう。お茶の木は寒さに弱く、強い霜にあたると葉が茶色く変色してしまいます。そこで五月五日の立夏を目前に控えた晩春である八十八夜の頃であれば、あおあとした柔らかかなお茶の新芽が生え揃い、茶摘が始まる季節となります。その年初めて摘んだお茶を一番茶といい、前年の秋から蓄えられた栄養が新芽にぎっしり詰まっているため、不良長寿の縁起物として珍重されてきました。

\*

五月といえは端午の節句、こどもの日ですね。男の子がいる家では、五月人形を飾ってお祝いをし、男の子がいなくても柏餅やちまきを食へ、菖蒲湯に入ったります。

その昔日本では、五月五日は薬狩りを行う日として、鹿狩り(鹿の角を薬として用いる)や薬草摘みを行っていました。薬草はショウブやヨモギなどで、ショウブは葉や根を漢方として利用されていますが、その香気が邪気を祓うとして、菖蒲湯に用いられるようになりました。そしてそのショウブが「尚武」と音が通ずるため、兜や鎧を飾り、男の子の前途を祝うようになったそうです。

さて柏餅とちまきですが、ちまきは2千年以上の昔、人々に支持されていた政治家が、陰謀により国を追われ川に身を投げたことから、毎年五月五日の命日に、供養のためにちまきを供えるという中国の風習からきているようです。それに対して柏餅は、新芽が出るまで葉が落ちない柏の葉を用いることにより、家系が途絶えない子孫繁栄の縁起物として生まれ、日本独自の風習となります。

## 童謡 茶摘の

「あれに見えるは茶摘ぢやないか  
 あかねだすきに菅の笠」と  
 唄れるような姿は  
 機械化が進んだ  
 現代では  
 あまり見ることが  
 できません。  
 それでも  
 最上級品の  
 玉露などは  
 今でも手摘みされています。



一般に関東では柏餅  
 関西ではちまきと  
 言われています。

でも世にお餅

だけが包まれた

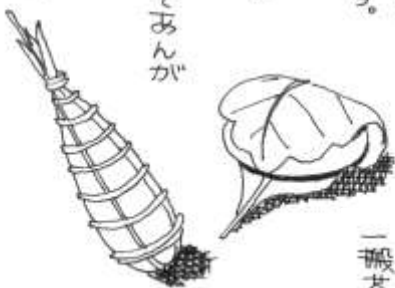
ちまきよりも

小豆あんやみそあんが

くるまれた

柏餅の方が

お持な感じが  
 しませんか？



高級な茶葉は  
 新芽と若い茶葉を、  
 一撮の茶葉は  
 新芽と4、5枚の  
 若茶葉を摘み  
 とります。  
 一年で主においしい新茶なら  
 一撮茶葉も風味は十分！

